

2021年5月2日 礼拝説教要旨

詩編講解説教59「人間の回復」

詩編59：13～18、ルカ9：37～43

1節の表題に「サウルがダビデを殺そうと、人を遣わして家を見張らせたとき」とあります。この話はサムエル記上第19章にあります。少しあらすじを申しますと、サウルは百戦錬磨のダビデに嫉妬して殺意を抱きます。ある時、ダビデがサウルの傍らで豎琴を弾いているとサウルはダビデに向かって槍を投げつけ殺そうとしました。ダビデは難を逃れ家に帰りますが、サウルはダビデの家に見張りを遣わして殺させようとしします。言わば、刺客、暗殺者を送り込むわけです。しかしダビデの妻ミカル、この人はサウルの娘ですが、彼女が機転を利かせてダビデを逃します。第59編はその話が背景にあります。

それゆえ第59編には「夕べになると彼らは戻って来て、犬のようにほえ、町を巡ります」（7、15節）という繰り返しがあります。夕べになると野犬がうろつき命を狙う。それがサウルの送り込んだ見張り、刺客であると理解できます。夜、闇に紛れて命を狙う者がやってくる。そういう状況は、わたしたちには無関係のように感じます。確かにわたしたちが暗殺者に命を狙われるということはほぼないと言ってもよいでしょう。特に戦乱のないこの平和な時代で普通の生活をしていれば、誰かから刺客を送り込まれるようなことはないのです。では本当にこれは無関係な話でしょうか。

ある注解書では、中世ヨーロッパの世界では、人々の恐怖として疫病（ペスト）、長患い、他国からの侵略、妖術や魔法、税吏（税金を取り立てる役人のこと）、こういうものが人々の恐怖であったとあります。確かに暗殺者はめったに来るものではありませんが、疫病は知らず知らずのうちに忍び込んでくるかもしれません。特に今の時代であれば、新型コロナウイルスをすぐ頭に思い浮かべることができるでしょう。まさしくコロナは静かに忍び寄る暗殺者のような存在かもしれません。

また「口をもって犯す過ち、唇の言葉、傲慢の罫に、自分の唱える呪いや欺く言葉の罫」（13節）とあります。ここでは言葉の問題があります。この二、三日の新聞での記事ですが、コロナ禍で人々の不安が高まり、デマや陰謀論が広がっているというものがありました。例えば「コロナのワクチンにはマイクロチップが入っていて、5G電波で操られる」とか。そういう虚構があたかも真実のように語られ人々が翻弄されてしまう。熊本地震の時もそうでしたが、危機的な状況下ではそういうデマや噂が広まりやすい。加えて現代の急速なデジタル化によって、一気に多くの情報が流布、拡散されていきます。そこには偽の情報も紛れているでしょう。人々はますます疑心暗鬼になり、人を信用することができなくなります。もちろんデマそのものが一番悪いのですが、その一方でデジタル化の功罪もあると思います。もちろん便利でよいこともあるけれども悪影響もある。それを冷静に見極めなければなりません。

カミュの『ペスト』がよく読まれているそうです。その中で疫病によって人々の言葉が陳腐になるということが書いてあります。言葉に重みがない。真実味に欠けるのです。先ほどのデマということも言えるでしょう。また人々は決まり切った一つのワードを繰り返すのです。口を開けばコロナのこと、会話が決まってしまうのです。加えてもう一つ、言葉に心がこもらないということがあるのではないかと。今では当たり前のオンライン会議ですが、そのことをよく感

じます。双方向と言いながらも、何か対話が一方通行のように感じてなりません。また多くの教会で礼拝の配信がなされています。それはこういう状況下で仕方のないことですが、それで果たして礼拝が成立するのか。そのことは改めて検証していかなければならないことです。礼拝で共に集まって聴く言葉とオンラインで聴く言葉は何かどこか違う。「欺く言葉の罟」とあります。このような急速なデジタル化のうねりの中で、気づかぬうちに大切なことを見失っているのではないかと。それもまた夜に忍び寄る暗殺者なのかもしれません。

そしてそのように言葉が後退すると、コミュニケーションが成立しなくなり、人は孤独になっていきます。これだけ SNS が発達して、人と人が繋がりやすくなっているにもかかわらず、孤立する人が多いというのはそういうことなのかもしれません。そしてそれが今日のところの「犬」という表現に表れているように感じます。獣化、動物化する。人間性が失われていくのです。人間は関係性を持つ存在です。「人が独りでいるのはよくない」と言われて、神さまはアダムにエバを与えました。それは人が神の形に造られたことにも関係します。それは神さまと通じ合うものとして本来人間が造られたことを意味します。神さまとの関係性が人を人にするのです。そこには神さまと通じる言葉がありました。しかし人間はこの言葉を捨てたのです。約束を破り、関係性を捨てました。それが罪の始まりです。

しかし神さまは再び神の言葉を与えてわたしたちとの関係性を回復してくださいませ。それがイエス・キリストです。「言は肉となってわたしたちの間に宿られた」(ヨハネ1:14) この神の言葉であるキリストによって、神さまとわたしたちとの関係性が再び構築されます。そして人と人との関係もそこから作られていくのです。人間性の回復がそこにあります。わたしたちから言葉を奪い取り、関係性を失わせていく暗殺者、闇の力に抵抗するのはこの神さまの救い以外にありません。

「わたしは御力をたたえて歌をささげ、朝には、あなたの慈しみを喜び歌います。あなたはわたしの砦の塔、苦難の日の逃れ場」(17節) どんなに闇が深く、暗殺者の脅威にさらされようとも、わたしたちは神さまの救いに逃れることができる。そこでわたしたちは希望の朝を迎えるのです。ここに罪の闇の終焉が約束されています。そしてそこには新しい言葉、救いを喜ぶ賛美の歌がのぼるでしょう。御前に回復された人間の語る新しい言葉があります。

最近、よく考えるのは、礼拝そのものが一つの完結した神の言葉ではないかということです。ただ説教だけではない。説教だけ聴いていけば、読んでいけばいいのではない。説教も聖餐も祈りも賛美も、招きの言葉から始まり祝福、後奏まで、すべてが一つの神さまの言葉なのです。それらが一つになって神の言葉はわたしたちの中に受肉する。そしてこの礼拝から押し出されていくときに、わたしたちもまた神の言葉に生き、これを伝える者とされていきます。